

---

# 立冬1 心を殺して

地森映子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

立冬1 心を殺して

### 【Nコード】

N56070

### 【作者名】

地森映子

### 【あらすじ】

真野利奈は総合商社に勤める普通のOL、  
晃一郎は大企業グループの御曹司。  
そんな二人の別れと、再会の物語。  
ハッピーエンドになる予定です。

**（前書き）**

あの時・・・

誠実に接してくれてさえいたら、  
心はもっと楽になれたかな・・・

あの時・・・

酷いことをしてしまった、  
後悔しても仕方がないけれど・・・

今日は、秋の気配が消えて、  
11月初旬だというのに、真冬のように寒い日だった。

利奈は毎月1回通っているネイルサロンで、  
出迎えた担当ネイルストの女性にコートを渡し、

「利奈さんこんばんは、今日一日寒かったですね」

「そうそう30歳にもなると、突然の寒さには順応できないのね」

笑いながら他愛もない話をしていた。

実際の心の中は、

深い悲しみに沈んでしまうのではないかという状態なのだ。

「今月は早めの来店ですね。まだ2週間ちょっとしかたっていない  
ですよ？デザインが気に入らなかったのですか？」

利奈は苦笑いしながら、

「違うのよ、気分転換したかっただけなの」

今まで利奈はきっちり4週で来店していたので、  
ネイルストはやや驚いたようだったが、自分の落ち度ではないと知  
ると、

安心したように、

「今回はどのようになさいます？ 気分転換に明るめのお色にしま

す？」

ジェルネイルは一般的なマニキュアなどに比べると高価ではあるが、一ヶ月程度長持ちするので、

最近のネイルサロンではジェルネイルが主流になりつつあった。

しかし毎月通っていると、

デザインを考えるのも億劫になってきて、

シンプルなものを注文するというのが、大抵の女性の傾向だ。

利奈もその傾向から外れず、

最近では、すべての人間に受け入れられるような、

エレガントではあるが、シンプルなネイルを注文するようになっていた。

「今回は綺麗目のおとなしいピンクのカラーでグラデーションにしてください・・・でもシンプル過ぎて気分転換にならないかな？」

ネイリストは「かしこまりました、また一段とシンプルですが、気分転換になるように綺麗に仕上げますね」と、

笑顔で作業に入った。

「利奈さん、今日はなんだか元気がないですね、どうかされました？」

やはり隠しているつもりでも、

顔にでてしまうのかと、自分に呆れながら、

だんだん除去されていく、自分のネイルを見入っていた。

「元気なんだけど・・・」

と言葉を濁した。

ネイリストも心得たもので、それ以上は何も聞かなかった。

ジェルネイルの除去は、

通常の除光液では落とせないの、

自分の爪の健康のためにもネイルサロンでおこなうようにしていた。特別な薬品をしみ込ませたコットンを爪に乗せ、銀色のホイルで指をまく、

自分の指を見ながら、

利奈は感傷に浸っていた。

利奈にはネイルサロンに行き始めた頃の、

二年前に告白され付き合いだした、

晃一郎という彼氏がいた。

利奈の勤める商社の中でも、出世頭で女子社員のなかでも一番人気だったし、利奈も憧れていた。

そんな彼から告白され、どんな幸せが自分に舞い降りたのかと思ったものだ。

彼とは仕事に支障をきたさないよう、

同僚には秘密にしながら逢瀬を重ねていたが、

いつかは結婚できるもの・・・いや近いうちに結婚できるもの、愛し愛されているもの、

利奈は信じて疑っていなかった。

先月、

「話があるんだ」

と彼のマンションに呼び出され、

『改まってなんだろう・・・何の記念日でもないし、でも・・・もしかしてプロポーズかな』

と利奈はウキウキしながら、

一階のエントランスで彼の最上階にある部屋番号のインターンフォンを押した。

エントランスに入ると、

マンション専属のコンシユルジュに慇懃な笑顔で出迎えられた。

今考えれば、立地的にもマンションのグレード的にも、

一介のサラリーマンが住めるような所ではないと、

思い至らなかつた自分が不思議だったものだ、考えていた。

部屋に着くと、

晃一郎に出迎えられ、

勝手知つたるリビングに向かうと、

一人の見知らぬ男性が厳しい顔をして二人を出迎えた。

「話ってなあに？」

と晃一郎に尋ねた。

しかし彼の口からは、何も発せられず、

代わりに弁護士だと名乗る、因幡という男から、

利奈を絶望に追いやる言葉が襲つたのだった。

因幡は淡々と、

晃一郎は日本有数の企業グループの御曹司であること、

現在勤める会社は修行目的で出されていたこと、

今月中に一族の会社に戻るため、会社を退職すること。

半年後に幼いころからの婚約者の女性と結婚すること、  
利奈とはもちろん別れなければならないこと、  
手切れ金のこと、

手切れ金を受け取った後の誓約書のこと、

因幡は冷たく言い放った。

呆然とした。

そのときは何も考えられないようで、  
でも、愛する晃一郎にすぎったり、泣き叫んだりできないかった。  
一言だけ、目は晃一郎を見据え、

「私は二年もの間、晃一郎さんの何をみていたんだろう」

と言うと、晃一郎は、なおも黙っているので、

「でも同じだね、晃一郎さんも、私のことを手切れ金をつけとるよ  
うな女だと思ってるのだから・・・  
何も見てなかったね」

堰き止めていた涙があふれるようこぼれた。

「手切れ金なんていらないよ・・・でも、その誓約書ってのは書くか  
ら安心して・・・ふふ・・・」

と乾いた笑い声をだした。

「どこに何を書けばいいのでしょうか？　言われたまま書きます。」

晃一郎は最後まで、



何も言わずに、  
振り返らず部屋を後にする利奈を見ていた。

利奈は自分がどのように自分の部屋に帰りついたか覚えていない、  
いつの間にか寝ていて、

翌朝、いつものように起きてみると、

昨夜のことは事実なのだと、

また涙がこぼれた。

しかし、日常は襲ってくるもので、

会社には普通に出勤し、

退職する、晃一郎の引継ぎも、

残る社員から贈られる記念品のカンパも、

送別会への参加も、他の同僚と同じ用に行った。

悲しみを隠すというより、何も考えないようにするという日々だった。

先月から今日までの日々を思い出しながら、  
自分のネイルが仕上がっていく様を眺めていた。  
清楚な美しいピンクだ。

「30歳でもこんな可愛い色大丈夫かな？」

とふざけて言ってみたら。

「利奈さんは、23歳くらいにしか見えませんよ」

とあからさまなお世辞を言ってくれた。

「23歳は言い過ぎじゃない？せめて28歳くらいにしてくれ  
たら、真実味があるのに」

と笑ったのだった。

施されたネイルを見ると、  
案外気分転換にはなったものだ。  
お礼を言つて、ネイルサロンを後にした。

手切れ金は不要だと言つたのに、  
昨日、利奈の口座に600万円振り込まれていたので、  
弁護士の因幡に連絡をとると、

「不要でも受け取っていただかないと困るのです」

押し切られてしまった。

もう何もかもどうでもよかつたし、これ以上思い出したくもなかつたので、

「では、そちらも同じでしょうけど、私も、もう係わり合いになりたくないの、これ以上は何もしないでください」

念を押して電話を切つた。

吹っ切れた？

そんなことあるわけがない。  
心を殺しているだけなのだ。

何も根拠のない、何かで自分を支えている。

まだ先のことはわからないけれど、  
しばらくは、このままでいたいと、  
ぼんやり思つた利奈だった。

（後書き）

初めての投稿です。  
拙い文章で申し訳ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5607o/>

---

立冬1 心を殺して

2010年10月28日23時43分発行